最強の職業は勇者でも賢者でもなく錬金術士（仮）らしいですよ？ 8

著 あてきち
ATEKICHI

Illustration：しがらき旭

死者殺し

ヒビキの日本での友人たちが異世界で結成した冒険者パーティー。

新藤大樹（シンドウタイキ）

ヒビキの親友。

山原亜麻音（ヤマハラアマネ）

ヒビキの幼馴染。

葉渡候一（ハワタリコウイチ）

ヒビキの従兄で担任。

シア

謎のクリスタルホーンラビット。

豊月恭子（トヨツキキョウコ）

ヒビキの同級生。

地底都市テラダイナス

ダンジョンの先にある伝説の街。

パトリシア

テラダイナス市長。「三界の賢者」の一人。

クレアンナ

パトリシアの秘書。

アナスタシア

かつてクロードを育てたエルフ。死んだはずだが……？

神々

異世界を管理する上位存在。

主神

神々の頂点。軽薄。

理神

ヒビキにそっくりな神。

美神

語尾が変な美の女神。

イヴェル

邪神に仕える聖獣。

その他の神

冥神、医神、魔神、地神、海神、天神、戦神、善神、邪神

主な登場人物 Main Character

クロード

ヒビキに仕える獣人の勇者。邪神に命を狙われている。

真名部響生（マナベヒビキ）

異世界に召喚された高校生。職業は「鑑定士（仮）」。

エマリア

ヒビキの異世界での初めての友人。エルフの弓使い。

リリアン

ヒビキの妹分である賢者。魔法で皆を助ける。

サポちゃん

理神の聖獣。

ヴェネ

魔神の聖獣。

ユーリ

人間と魔族のハーフ。実は魔王候補生。

ローウェル

ハバラスティア王国の都市。ヒビキの拠点。

ターニャ

宿屋の受付嬢。

バルス

冒険者ギルドのギルドマスター。

ジュエル

冒険者ギルドの副ギルドマスター。

地球で言えば十二月に入った頃。
王都の王城に誂えられたとある一室に、カーテンの隙間から朝日が差し込んだ。
「……んっ」
直接光が当たったわけではないが、室内が明るくなったことを瞼の奥の瞳が敏感に感じ取り、ベッドに眠る幼い少女の意識を覚醒に導こうとする。
「んん……むにゃむにゃ」
しかし、少女の怠惰な心がそんな生理反応を無視し、再び微睡みの深淵へ堕ちようとして――。
「起きてください、ステファニー様！」
「きゃあああっ！」
――有無を言わさぬ暴挙によって、少女は目を覚ました。無理矢理布団を引っぺがされては眠るに眠れない。酷い起こし方である。
「……おはよ、マシェカさん」
「おはようございます、ステファニー様。さあ、すぐに御髪を整えましょう。今朝も凄まじい寝癖ですよ」

鑑定士(仮)大百科

冒険の中で明らかとなった用語や事件を徹底解説！

職業……

15歳になると神から与えられるもの。実際に就く職業とは別で、
本人の素質や気質を表している。
『鑑定士(仮)』は、普通の人間ではないヒビキのために主神が作った特別な職業。

神選職……

神に選ばれた特別な者だけが授かる超希少職。武勇に優れた『勇者』、
魔法に長じた『賢者』、その両方に才を持つ『魔王』の、3つの神選職がある。
勇者は4人、賢者は7人、魔王は8人まで同時に存在できる。

不動の鎖……

勇者であったクロードを弱体化させている鎖状の呪い。
ヒビキたちの尽力により、8本のうち4本の鎖を解除した。

迷宮都市……

ダンジョンを攻略した者のうち、さらに選ばれた者だけが辿り着ける場所。
魔法もスキルも使えず、神々の干渉さえも拒絶する。
3つある迷宮都市のうち、ヒビキたちは地底都市テラダイナスと行き来できる。

神々の世代……

11人の神は第一世代と第二世代に分けられる。創世期から生き続けている主神、
魔神、医神が第一世代。ある事件で一度死亡し、再誕した8人の神が第二世代。
第二世代の中に、主神と敵対する者がいるようだが……？

「……おねがいします」
まだ半分眠そうな顔のまま、ステファニーと呼ばれた少女は、手を引かれて鏡台の前に腰掛けた。鏡に映るのは、せっかくの艶やかな水色の髪を大爆発させた哀れな少女。
その名はステファニー・ランクドール。
勇者や賢者に次ぐ希少職『聖女』を与えられた希有なる存在……なのだが、寝起きの彼女はどこにでもいるただの女の子だった。髪を整えながらコクリコクリと頭を揺らして眠気と戦っている。
寝癖を直し、顔を洗い、改めて髪型を整えてもらう。その頃にはさすがのステファニーもしっかりと目を覚まし、身だしなみを整え終えた頃にはまさに聖女らしい高貴な少女がそこにいた。
「終わりました、ステファニー様」
「ありがとう、マシェカさん」
「我ながら惚れ惚れする出来映えです。大変お美しいですわ、ステファニー様」
侍女のマシェカはうっとりした表情で鏡に映るステファニーを眺める。毎朝飽きないわねと苦笑しながら、ステファニーも自分の姿を見つめた。
マシェカの手入れのおかげで艶やかな水色の長い髪はツーサイドアップにまとめられ、幼くも整った顔立ちのステファニーによく似合っている。
純白のドレスローブに身を包んだ姿はまさに聖職者を体現したように神秘的で、この姿を毎日目にしているマシェカも毎度うっとりしてしまう美しさだ。

そう思うのはマシェカだけではない。ステファニー自身でさえ、そう思えるほどだった。
（……年相応の見た目をしていたらって条件がつくけどね）
ステファニーの年齢は十八歳。だというのに鏡に映る彼女の見た目は十歳前後。どんなに大きく見積もっても十二歳がせいぜいだろう。
思わず零しそうになるため息を我慢し、ステファニーはマシェカへ話しかける。
「今日の予定は何だったかしら？」
「午前中は教会でお祈りを。午後からは家庭教師がいらっしゃる予定です」
「そう、分かったわ。では早速、朝食にしましょう。行くわよ、マシェカさん」
「畏まりました。ですがステファニー様、私のことはどうぞマシェカとお呼びください」
「もう、いつも言ってるでしょう。二人きりのときくらい好きに呼ばせてちょうだい。堅苦しいのは嫌いなのよ」
ステファニー・ランクドール。今でこそ聖女として王城で暮らしている彼女だが、元々は王都の貧民街に暮らす孤児であった。
また、前世の名前を清水真理子という。彼女は元日本人の転生者だ。身分制度のない社会で暮らした記憶のある彼女にとって、王城での生活は三年経った今でもなかなか慣れないものだった。

◆◆◆

午前中に教会でお祈りを済ませ、昼食を終えると家庭教師が来るまでの短い時間がステファニーの自由時間だった。
一人になりたいからと、マシェカにも部屋から退出してもらうとステファニーはスカートのポケットに隠し持っていたコンパクトミラーを開いた。
小さな鏡を覗き込む。しかし、そこにステファニーの顔は映っていない。
『ごきげんよう、ステファニー』
鏡に映る少女から鈴の音のような愛らしい声が響く。ストロベリーブロンドの髪を靡かせる神秘的な美しさを持つ幼い少女だ。
「ごきげんよう、美神」
その名は美神。この世界を創造せし十一の神の一人……が作り出した美神の複製体である。
神々は地上で直接活動することはできない。美神はステファニーとコンタクトを取るため、自身の複製体をこのコンパクトミラーの中に生み出したのだ。
「もうすぐ家庭教師が来るから、そのタイミングで入れ替わりましょう」
『よろしくてよ。では、わたくしが与えた力を使うとよろしいわんぺ』
「そのつもりよ。独立スキル『ミラードミラージュ』発動」
ステファニーがそう呟くと、コンパクトの鏡から光が溢れ出した。光はステファニーを包み込み、

その姿を変貌させていく。
やがて光が収まると、そこにはステファニーと、見たことのない少女の姿があった。
年齢はステファニーと同じくらいだろうか。ロングヘアのステファニーとは対照的に露草色の髪は肩に届かないくらい短い。しかし、瞳の色はステファニーと同じ金色に輝いている。
彼女は一体何者なのか。露草色の髪の少女の手には先程までステファニーが手にしていたはずのコンパクトミラーが収まっていた。
「うん、問題なさそうね。そっちはどう、美神」
「ええ、よろしくてよ。あなたの代わりに見事家庭教師をぎゃふんと言わせてみせるわ」
美神と呼ばれ、当たり前のように答えたのはステファニーの姿をした少女だった。どうやら、独立スキルの力によって美神はステファニーの姿に変身して鏡から飛び出したらしい。
「一応言っとくけど、私の成績より良くも悪くもならないでね。後が困るんだから」
「承知しているわ。美とは偽ることに通じている。心配しなくともわたくしはきっちりステファニーを演じて差し上げるわ。ふふふ、あなたに変身していると語尾が崩れなくて素敵ね」
優雅に微笑むステファニーに化けた美神は、本物の自分よりも美少女に見えてちょっと悔しいと思ってしまうステファニーだ。
「まあ、いいわ。私はあなたに頼まれた仕事をこなしてくるから、後はお願いね。もう一回『ミラードミラージュ』！」

コンパクトの鏡から再び光が溢れ、露草色の髪の少女に変身したステファニーを光が包み込んでいく。光が触れたところから、ステファニーの姿が見えなくなり、最後には彼女の姿は完全に景色に溶け込んでしまった。

「透明になれるのは便利よね。普通のスキルじゃ看破できないんでしょ？」

「独立スキルは神々の権能そのもの。たとえ固有スキルであってもそう簡単に見抜くことはできないわ。安心して行ってらっしゃい、ステファニー」

「この姿の時はステラって呼んでちょうだい。じゃあ、行ってくるわね」

「よろしくお願いしますね、ステラ。あなたと私の目的を叶えましょう。そう――」

「「全ては美しくあるために」」

ステファニーに変身した美神は、誰もいないはずの方向に向かって「行ってらっしゃい」と小さく手を振るのだった。

◆◆◆

「ヒビキ、大丈夫？」

「うん。エマリアさんは冒険者ギルドをお願い」

心配そうにこちらを見つめるエマリアさんに俺、真名部響生は笑顔を返し、頷いた。

姉さんこと理神の聖獣を捜すため訪れた、ハバラスティア王国の王都バスティオン。王都で家を借りた翌日、神様に引っ越しの挨拶をするという王都の慣習に従い、エルフの冒険者エマリアさん、魔族の荷運びユーリ、獣人の勇者クロードを連れて美神教会を訪問した。そこでまさかの美神と思われる少女と遭遇した。

俺の技能スキル『世界地図』にもその存在は表示されず、本人の可能性が高い。しかし、神々はその強大な力ゆえに、地上に降り立てば多大な影響を与えるため、原則神域から出ることは許されないはずなんだけど……彼女は本当に美神なのだろうか。

サポちゃん、どう思う？　美神教会を出て道を歩きながら、俺の中にいる理神の聖獣、サポちゃんに尋ねた。

『サポちゃんより報告。理論上はありえません。しかし、この世に絶対は存在しません。サポちゃんより以上』

それって、結局分からないってこと？

『サポちゃんより報告。回答は是。現状、確認手段がありません。サポちゃんより以上』

うーん、そっか。だったら、考えても無駄かなぁ。
「やっぱり私とユーリも護衛としてついていった方がいいんじゃない？」
心配そうな顔でエマリアさんが提案した。俺は首を横に振って答える。
「何かするつもりなら、遭遇した時に襲い掛かってきているはずだよ。彼女が何者か分からないけど、今すぐ何かされるってことはないと思う。それに、あんまり敵って感じがしなかったし」
「うーん、ヒビキの勘を当てにして大丈夫かしら？」
エマリアさんは腕を組んで悩み出した。信用ないなぁ……。
「大丈夫だよ、エマリアさん。俺だってダンジョンの中で結構レベルアップして多少は強くなったんだからね。それに、クロードが護衛してくれるから大丈夫さ。ね、クロード？」
「ウォンッ！」
大柄で目立つ獣人のクロードは現在、正体を隠すために魔法道具『変装リング』で黒い狼（おおかみ）の姿に変身している。変身中は人間の言葉が話せないので、吠えることで返事をしていた。
『お任せください、ヒビキ様。何が来ようと必ずお守りいたします！』
俺の脳裏（のうり）にクロードの声が響く。右の前足から伸びる『主従繋糸（リレイションパス）』の糸が、俺の右手の甲に繋がったのだ。『主従繋糸』の糸は他の人には見えない。クロードが狼に変身していても、これのおかげで俺とクロードはこっそり言葉を交わすことができた。

姉さん成分を取り込んだせいで女性化してしまった俺だが、神様の力のおかげか『主従繋糸』の接続がかなり安定するようになった。近距離での交信ならほとんど制限を感じない。
男に戻ってもこの状態が続いてくれるとありがたいんだけど。

『サポちゃんより報告。ヒビキ様が男性に戻っても理神様の力は残るので問題ありません。サポちゃんより以上』

そっか。教えてくれてありがとう、サポちゃん！

『サポちゃんより報告。謝意を受諾。サポちゃんより以上』

「それじゃあ、ユーリ、エマリアさんを頼むね」
「はい、任せてください。さあ、行きましょう、エマリアさん」
「ええ、分かったわ、ユーリ。じゃあ、行ってくるわね、ヒビキ」
「行ってらっしゃい」
エマリアさんとユーリは冒険者ギルドで活動し、冒険者の視点から聖獣捜しの情報収集を手伝ってくれる予定だ。まだ心配そうにしているけど、ユーリに手を引かれてエマリアさんは冒険者ギル

ドへ向かった。
手を振って二人を見送る。姿が見えなくなると、俺は隣に立つクロードへ声を掛けた。
「俺達も行こうか、商業ギルドへ」
「ウォンッ！」
多分「はい！」と答えたのだろう。快活に吠えるクロードとともに、俺は商業ギルドへ向かう。ギルドで鑑定士として働きながら情報収集をするためだ。
……ちなみに、クロードの背に乗るのはやめました。だって恥ずかしいんだもん！

◆◆◆

「いらっしゃいませ、商業ギルド王都東方支部へようこそ」
「こんにちは、イエンナさん」
「はい、こんにちは。ヒビカ様。クロちゃんもこんにちは」
「ウォン！」
王都では「ヒビカ」という偽名で活動する俺に、ニコリと微笑む商業ギルドの受付嬢、イエンナさん。深緑色の長いストレートヘアが今日も美しい。
「今日は如何なさいました？」

「仕事の確認に来ました。鑑定士の仕事はありますか？」
「まあ、早速仕事を受けていただけるのですか。もちろんございますよ。お受けになりますか？」
ポンと手を合わせて嬉しそうに微笑むイエンナさん。淑やかな笑顔が大変美しい。
「はい、お願いします」
「ではすぐに準備をいたしますので、作業部屋へ案内いたしますわ。少々お待ちください」
イエンナさんは受付の奥へ向かい、他の従業員と話をした。相手が頷くとこちらへ戻ってくる。どうやら受付を交代してもらったようだ。カウンターから外に出て、俺を案内してくれるらしい。
「お待たせしました。では、参りましょう」
「クロも一緒で大丈夫ですか？」
「クロちゃんもですか。えっと……」
動物が同伴する機会が少ないのか、イエンナさんは少し悩んだ。
そして周囲へ視線を向けると……商人達が勢いよく首を左右に振っている姿が目に映った。交代で入った受付嬢も同じ仕草をしている。
まあ、そうだよね。普通の狼でも怖いのに、クロは一般的な狼より二回りは大きな体格をしている。主人である俺から離れて放置されては困るだろう。
イエンナさんもそれを理解したのか、眉尻を下げて微笑み、コクリと頷く。
「クロちゃんもご一緒にお願いします」

「分かりました。行こう、クロ」
「ウォン！」
クロードが嬉しそうに吠えた。ついさっき美神教会でも置き去りにされたところなので、そうならなくて安心したようだ。
俺とクロードはイエンナさんに案内されて、玄関ホールの奥にある階段から二階へ向かった。

「こちらにお掛けください」
案内されたのは、応接室のようなちょっと高級そうな部屋だった。商談用の個室だろうか。
言われるままにソファーに腰掛け、クロードは俺の隣にちょこんと座った。
ローテーブルを挟んだ向かいのソファーにイエンナさんが座り、バインダーに挟まれた用紙とペンが俺の前に置かれた。
「これは？」
「商業ギルドで採用している公式の鑑定書の用紙です。こちらに鑑定結果をご記入いただきます」
「じゃあ、私が書いたこの用紙が依頼主に渡されるんですか？」
「人によりますね。匿名をご希望の場合は、この用紙の内容を基に商業ギルドの名で代筆することも可能です。ヒビカ様のスキルレベルは鑑定判別機で確認済みですから問題ありません」
「それでお願いします」

ヒビカは偽名だからね。あまり不特定多数に名前が広がるのはよくないだろう。
「では、品物をお持ちしますね」
イエンナさんはそう言うと、安心したようにホッと息をついた。
「それにしてもヒビカ様が来てくださって本当に助かりました。現在、王都にダニエル様がいらっしゃらないので、未鑑定の品がどんどん増えていまして」
「どんどん増えて？　どれくらいあるんですか？　五十個くらい？」
「先週、百を超えました」
「ひゃく!?」
まさかの三桁に驚いてしまう。イエンナさんも遠い目をしていた。
「スキルレベル1や2で鑑定できない品ってそんなに多いんですか？」
今まで『鑑定』スキルを使ってきて鑑定できなかった物なんてあっただろうか。俺が疑問を感じながら首を傾げると、イエンナさんは頬にそっと手を添えて困ったような表情を浮かべた。
「そういった品もあるにはあるのですが、どちらかというとスキルレベル3以上の『鑑定』スキルで鑑定してもらったという結果がほしいようなんです」
どうやら溜まっている品々の多くは、スキルレベル1や2で十分鑑定できる物らしい。鑑定品をギルドに預けているのは多くが商人で、内訳は骨董品やダンジョン産の魔法道具など。
販売するにあたって鑑定書があった方が当然信用されやすく、彼らの理想としては王国最高の鑑

定士ダニエル・カーターが書いた鑑定書を添え、商品に立派な箔を付けたいのだそうだ。
「そんな面倒な。お断りできないんですか」
「困ったことに、そういうところに限って大商会からの依頼だったり、商人の取引相手が貴族で、高レベルの鑑定書をお求めになったりするものですから、なかなか断りづらいのです。ダニエル様は割と気軽に鑑定してくださるので、私達もつい甘えてしまって……気が付いたら」
「百個以上も溜まっちゃったんですね」
イエンナさんは小さくため息をつくとコクリと頷いた。
「でも、私の鑑定で大丈夫なんでしょうか。ダニエル様じゃないんですけど」
「問題ありません。先方には『スキルレベル3以上の『鑑定』スキルによる鑑定書』というかたちで依頼を受注していますので。一代限りの準男爵とはいえ、ダニエル様は正式な王国貴族です。一介の商人がダニエル様を指名して依頼することなど許されませんから」
とはいえ、本当にダニエルさんでないとダメな品も一部あるそうだ。取引相手の貴族の爵位が高いとそういうこともあるらしい。だけど、大半は俺が鑑定しても問題ない品のようだ。
「分かりました。でも、一度にたくさんはやりたくないので少しずつでもいいですか？」
「ええ、もちろんです。そうですね、一回につき五品ずつで如何でしょう」
イエンナさんの説明によると、鑑定して結果を記入して、もろもろ確認等の手続きをやったら、大体二、三時間くらいはかかるそうだ。

王都に来た目的は理神の聖獣を捜すことだから、一日中商業ギルドに拘束されるのは避けたい。この街を見て回ったりもしなきゃいけないし。お金に困っているわけでもないので、鑑定の仕事はそれくらいが妥当じゃないだろうか。
俺はイエンナさんの提案を了承した。
「ありがとうございます、では早速鑑定品をご用意しますね」
そう言って、イエンナさんはこの部屋の脇にある扉に向かった。
後で説明されたけど、この部屋の隣が商人達から預かった鑑定待ちの品々を保管する部屋になっているそうだ。確かに、鑑定を必要とする品々をいちいち遠くから運んでいたのでは安全面が心配になる。その点、隣の部屋を行き来するだけなら安心だ。
これらの品々を鑑定するのがダニエルさんであることが多いので、ここは貴族向けに用意された部屋らしい。
「では、私はそちらの机で仕事をしておりますので、鑑定が終わったらお知らせください」
俺の鑑定が終わるまでイエンナさんもこの部屋に同席するそうだ。高価な品を扱っているのだから当然だろう。俺は了承すると早速鑑定に取り掛かった。

◆◆◆

【技能スキル『鑑定レベル3』を行使します】
【名　前】アユタヤ姫の彫像（ちょうぞう）
【大きさ】体高百センチメートル
【素　材】銀製（ミスリル含有率（がんゆうりつ）十二パーセント）
【基準額】金貨八百八十枚
【備　考】百四十七年前に創られた彫像。百二十年前に滅んだルオルエン王国最後の王女、アユタヤ姫の十五歳の誕生日を記念して国王が贈った品。
百年以上経過しても黒ずみが発生していないことから純ミスリル製と勘違いされることもあるが、ミスリルが十パーセント以上含有されている銀は酸化しないため、美しい銀色の光沢（こうたく）を維持することができる。
素材が純ミスリルであった場合の基準額は金貨三千枚。

【技能スキル『鑑定レベル3』を行使します】
【名　前】圧縮袋
【大きさ】体積五リットル
【素　材】麻布のような生地（詳細不明）
【基準額】金貨五百枚

【備　考】ダンジョン産の魔法道具。実際の体積より十倍の収納が可能な魔法の袋。
収納品の重量を百分の一に軽減する。時間停止機能なし。
普通の麻布よりは丈夫だが、破壊できないわけではない。袋が破損した場合、中身を取り出せなくなる点に注意が必要。

「ふぅ、こんな感じかな」
イエンナさんが用意した品々を鑑定し、鑑定書に詳細を記入していく。
美術品やら魔法道具やら色々あり、今書いた二つはかなりの高額品だ。残りの三つは金貨百枚未満ってところ。
今さらになって『鑑定』スキルについて少しだけ分かったことがある。どう鑑定したいかで内容に若干の差異が出るところだ。
今まで物品の鑑定は『これは何だろう？』と思って鑑定していたけど、今回は『これはいくらぐらいする物だろう？』というイメージで鑑定した。すると、それに合わせた鑑定結果を得ることができた。今まで『基準額』とか出たことないもんね。
一応、正面からだけじゃなくて他の角度からも鑑定してみたりもした。見る場所が変われば鑑定結果にも変化が生じるかもしれないからだ。今回は特に問題ないようだ。
「よし、終わり！」

『お疲れ様です、ヒビキ様』
ずっと隣で俺を見守っていたクロードが労いの言葉を掛けてくれた。正直に言えば、五品くらい鑑定した程度で疲れたりはしないけど、まあ、様式美ってやつだね。
しっかり丁寧にやったからか、たった五品の鑑定に一時間近くかかってしまった。鑑定書に綺麗な字で書かなくちゃいけないから、そっちに時間が取られた方が大きいけど。
「終わりましたか。拝見いたします」
俺の様子に気付いたイエンナさんがやってきて、鑑定書の内容を確認していく。一枚一枚丁寧に内容を読み込み、ゆっくりと頷きながら五枚の鑑定書を読み終えた。
「ありがとうございます、ヒビカ様。こちらは今から代筆処理しますので少々お待ちください。その前にお茶をお淹れしますね」
お茶を淹れてくれると、イエンナさんは俺の鑑定結果を書き写し始めた。二度手間ではあるけど、匿名手続きをするので俺の鑑定書をそのまま使うわけにはいかないそうだ。
しばらくして、作業を終えたイエンナさんが鑑定書を俺の前に差し出した。
「お待たせしました。こちら、内容に不備がないかご確認ください」
どうやら鑑定士として代筆内容に間違いがないか毎回確認しなければならないらしい。確かに、この時間を考えると一回の鑑定で五品くらいに抑えておいた方がいいだろう。あまり多いとイエンナさんの負担が大きいし、俺の待ち時間も長くなる。

内容に問題がないことを確認すると、俺は代筆鑑定書をイエンナさんに返した。
「ありがとうございます。では、本日の鑑定は以上となります。何か質問はございますか」
「これからも商業ギルドに来たらイエンナさんに声を掛ければいいんでしょうか？」
「基本的には私にお声掛けください。もちろん、私が不在の場合はその限りではありませんが」
「毎日は無理ですけど、来る時は午前中で大丈夫ですか？」
「それであれば大方私がご対応できるかと」
「では、それでお願いします」
「承知しました。これからよろしくお願いいたします、ヒビカ様」
「こちらこそよろしくお願いします、イエンナさん」
イエンナさんと握手を交わし、俺とクロードは商業ギルドを後にした。
ちなみに、一品あたりの鑑定代は金貨五枚らしい。日本円で五万円くらいかな？　それが高いのか安いのか判断が難しいけど……あと一回鑑定の仕事を受ければ今月の家賃代がチャラになるね。
金貨五十枚って大金のはずなんだけど……。
「この世界に来てから、金銭感覚がおかしくなっちゃいそう。日本に戻ってから大丈夫かなぁ？」
『どうかされましたか、ヒビキ様？』
「ううん、何でもない。それじゃあ、クロード、お昼は屋台で買い食いをして、午後から王都を散歩しようか。聖獣を捜さないとね」

『畏まりました、ヒビキ様。歩き疲れた際は私の背にお乗りください』
「できれば避けたいところだけど……その時はお願いします」
その場合、肉体的疲労のうえに羞恥という精神的疲労も重なるので、できれば回避したいところである。頑張れ、俺！

◆◆◆

「それで、結局聖獣は見つからなかったのね」
「うん」
エマリアさんの言葉に、コクリと頷いた。
その日の夜。皆で夕食をとりながら、その日の活動報告をしていた。まあ、初日で聖獣が見つかるとはさすがに思っていないけど、やっぱりちょっと残念ではある。
そんな俺に苦笑を浮かべながら、ユーリが口を開いた。
「私とエマリアさんは王都の冒険者ギルドに挨拶をして、依頼内容や王都周辺の魔物の分布を確認したりしたくらいですね。聖獣に関係しそうな情報はまだ見つかっていません」
「本当は王都の外に出て、周辺の探索とかもしたかったんだけど、やたらと男の冒険者がパーティーに誘ってくるから時間をとられて行けなかったのよね」

ユーリに続いてエマリアさんも報告をする。眉間にしわを寄せてちょっと不機嫌そうだ。
「パーティーに誘われたの？」
「下心が見え見えなのよ。まったく、入るわけないでしょうが」
「エマリアさんは美人ですから」
「ユーリだって声掛けられてたじゃない。荷運びだからって下に見てたのよ、あいつら」
「えっと、二人とも大丈夫？　クロード、というかクロを護衛につけた方がいいんじゃ……」
思わずクロードの方を見ると、仕方なさそうな顔をした彼が首を横に振っていた。
「それではヒビキ様の護衛がいなくなるのでダメです。それに、おそらく私の護衛など不要かと」
「え、でも……」
「大丈夫ですよ、ヒビキさん。その男性冒険者の方々は全員、エマリアさんがその……」
どこか歯切れが悪いユーリは、言葉の途中でエマリアさんに視線を向けた。彼女は得意げに微笑みながら、腕を組んでコクリと頷く。
「全く問題ないわ。全員きっちりシメといたから」
「ええ？」
俺は眉尻を下げて微笑むユーリへと視線を向けた。
「……エマリアさん、言い寄ってきた男性冒険者を全員、植物魔法で拘束しちゃったんです」
「えええ？」

「それでも騒ぐ人には、葉っぱで全身をくすぐったりして無力化していました。直接的な暴力とも言いがたいので、ギルド職員の人達もすごく対処に困っていましたね」
「えええ？」
「結局、その後でギルドマスターに呼び出されて事情説明をすることになったせいで、あまり時間を取れずに一日が終わってしまいました」
「エマリアさん？」
俺が尋ねると、エマリアさんは少しばかり慌てた様子で説明を始めた。
「しょうがないでしょ。私、ローウェル以外ではああいう手合いに絡まれることが多かったのよ。あの手の連中は最初にガツンと上下関係を理解させないとつけあがって鬱陶しいだけなんだもの。植物魔法が上達したおかげで楽に対処できるようになったのは僥倖ね！」
「……まあ、ほどほどにね。ユーリ、エマリアさんのこと、改めて頼むね」
「えっと、ほどほどに頑張ります」
俺とユーリは互いに苦笑を浮かべるのだった。
「リリアンはどうだったの？　テラダイナスで何か面白いことはあった？」
皆の話を聞きながら食事をしていた賢者の少女、リリアンに話を振ると、彼女は口に含んだスープを喉の奥へ流し、口を開いた。
「うん、今日はパトリシアさんに魔法を教えてもらったの」

「三界の賢者に魔法を教えてもらうなんて、とっても贅沢ですね」
嬉しそうに語るリリアンを、ユーリは微笑みながら見つめた。
「みんなでダンジョンに行って、修業したんだよ」
「パトリシアさんも一緒にダンジョンに？　えっと、記憶とかは大丈夫なの？」
地底都市テラダイナスの市長にして三界の賢者の一角、エルフのパトリシアさんは理神である姉さんを覚えている数少ない人間の一人だ。だけど、テラダイナスの外へ出たら理神の記憶を失う可能性が高いので、テラダイナスから出ることができないでいた。
「ダンジョンは理神の領域だから大丈夫らしいにゃよ。な、シア？」
「キュウッ」
テーブルの上で食事をしていた聖獣のヴェネくんが説明してくれた。隣にいたクリスタルホーンラビットのシアも同意するように鳴いてみせる。
「よかった。それなら安心だね。じゃあ、どんな魔法を教えてもらったの？」
「すっごい魔法だよ！　お兄ちゃんとクロさんをしっかり守るの！」
胸の前で両の拳をギュッと握りながら、リリアンは力強く言った。なんだか凄い魔法らしい。
「リリアンちゃん、私は守ってくれないの？」
少し悲しげな顔を見せるユーリ。慌てた様子でリリアンが答えた。
「ユ、ユーリちゃんもわたしが守るの！」

「ふふふ、ありがとう、リリアンちゃん」
「ええ、それじゃあ、私は？　私は守ってくれないの？」
悲しげな表情からパッと笑顔に変わったユーリの隣で、エマリアさんが期待するような顔をリリアンへ向けた。だが、リリアンはキョトンとした顔で首を傾げる。
「エマリアさんは……守らなくても大丈夫？」
「えええええっ!?　なんでよ、リリアンちゃん!?　私も守ってよおおおお！」
まさか仲間はずれにされるとは思っていなかったエマリアさんが、さっきのリリアン以上に慌てた顔でワタワタし出した。
それが可笑しかったのか、リリアンは両手で口元を押さえてクスクスと笑い出す。
「う、うん。エマリアさんも、ちゃんと守ってあげるの」
「ありがとう、リリアンちゃん！」
感激したエマリアさんがリリアンをギュッと抱きしめた。リリアンは楽しそうだ。
「ヴェネくん、具体的にリリアンは何の魔法を練習してるの？」
「あー、まあ、魔法を覚えたらリリアンちゃんが披露するからちょっと待ってにゃ♪」
と言って、ウィンクしてみせるヴェネくん。きっとリリアンは魔法を習得して皆を驚かせたいのだろうと察し、俺はコクリと頷いた。
「リリアン、魔法が完成したらお披露目よろしく」

「うん！　わたし、頑張る！」
何やら意気込みがすごい。テラダイナスで何があったんだろう？　でも、リリアンが楽しそうにしているのはとても嬉しいことだ。
「楽しみにしてるね」
俺は笑顔でそう言った。

◆◆◆

鑑定士の仕事を始めて一週間が経過した。商業ギルドへは三日に一度のペースで通うことにして、それ以外の日は主に王都巡りをしている。もちろん、理神の聖獣を捜すためだ。
ただ、今のところ聖獣どころか手がかりさえ見つかっていない。王都は広い。一週間掛けてもまだ東区を網羅したとは言えない。
少々焦れったいけれど、気長に捜すしかないんだろう。
この一週間で、おおよそ仲間の生活スタイルが確立された。
俺とクロードは商業ギルドで鑑定の仕事をしつつ、街中を練り歩いて聖獣捜し。エマリアさんとユーリは冒険者活動をしながら情報収集だ。
王都の中央に本部、四方に支部がある商業ギルドと異なり、王都の冒険者ギルドは南区にある一

つだけだ。俺は現在、東区を中心に聖獣捜しをしているので、エマリアさん達には南区を中心に情報収集をしてもらっている。聖獣が関係しそうな噂話などだ。

封印されているとはいえ、そこは聖獣。何かしらの影響が出ている可能性は高い。今のところ、俺が直接聖獣の気配を察知する以外に確実な捜し方がないので、できることからこつこつとやっていくしかなかった。

ちなみに、先日二人に言い寄ってきた男性冒険者達はエマリアさんにコテンパンにされたはずなのに、なぜか今は彼女らの手下みたいに振る舞っているらしい。

彼らは王都出身で顔が広く、意外と助けになってくれるらしいので、「仕方なく、仕方なくよ」と言いながらエマリアさんは受け入れているそうだ……と、ユーリが言っていた。

そして、リリアンはヴェネくんとシアと一緒にテラダイナスで魔法の修業を続けている。

最初は俺と一緒に商業ギルドへ通う予定だったけど、今は魔法の修業が楽しいらしい。朝に出掛けると夕方まで帰ってこないことが多い。

ただ、パトリシアさんは市長の仕事が忙しくてリリアンの相手をできない日もあるので、この一週間のうち二日は修業が休みになった。幸い、その日は鑑定士の仕事がなかったので、俺とリリアン、クロ、ヴェネくん、シアという女の子&アニマルパーティーで王都の散策を楽しんだ。

……おかげで物凄く目立った。東区ではかなり俺達の認知度が上がったような気がする。

リリアンがクロードの背に乗りたがったので、背中にリリアン、頭にヴェネくんとシアを乗せた巨大な黒狼クロと、それを引き連れる少女ヒビカこと俺……とっても目立ってました。

もうどうにでもなれ！　――と、途中で開き直って素直に王都散策を楽しんじゃったけどね。

◆◆◆

というわけで、さらに翌日。今日は商業ギルドで鑑定士の仕事をする日だ。これで三回目。そろそろ仕事にも慣れてきて、午前中のうちに問題なく作業を終えることができた。

「本日もありがとうございました。おかげで順調に鑑定品を捌けております（さばけ）わ」

「お役に立ててよかったです。でも、今くらいのペースで大丈夫ですか？　まだたくさん残ってるんですよね？」

初依頼の時点で鑑定依頼待ちの品は全部で百二十四点あったらしい。今日で十五点の鑑定を終えたことになるので、残り百九点だ。あと二十回以上鑑定しないと終わらないけど、その間に新たに鑑定依頼がくればいつまで経っても終わらないことになる。

「三日おき五点なら十分なペースです。それに、あまりにも依頼品が溜まっている状況ですので現在、スキルレベル３以上の新規鑑定依頼はお断りしているんです」

ということは、大体二ヶ月ちょっとあれば全てを鑑定し終える計算かな。できればそれまでに聖獣を見つけたいところだけど、確かに無理のないペースって感じだ。

「そもそもダニエル様が鑑定してくださるからと、私達も気軽に依頼を受けすぎたのですよ。今後は鑑定依頼の受注体制を改善していく予定ですので、ご安心ください」
「分かりました。じゃあ、今のペースで仕事をさせてもらいますね」
「はい、ではまたのご来訪をお待ちしております」
笑顔のイエンナさんに見送られて、俺とクロードは商業ギルドを後にした。

「さてと、どこかでお昼でも食べようか」
『はい、ヒビキ様』
狼姿のクロードを連れているので、昼食は基本的に屋台で購入した物を食べ歩きで済ませることが多い。さすがにこれだけ大きな狼を飲食店へ入れるのは憚られた。
屋敷に帰ってもいいんだけど、皆外出中で誰もいないからちょっと寂しいんだよね。
大抵は屋台で昼食を買って、食べ終わったらそのまま聖獣捜しに勤しみ、夕方の皆が帰ってくる頃に合わせて俺達も帰途につくといった生活スタイルになっていた。
とはいえ、たまには座って昼食を食べたい気もするなぁ。どこかにクロードも一緒に入れる飲食店があればいいんだけど。
そんなことを考えている時だった。俺の足下に何かが……というか、リンゴが転がってきた。リンゴを受け止めて手に取る。前から転がってきたみたいだけど。

「待って、待ってくださーい！」
買い物をしてきたのだろう。顔が隠れるほど荷物いっぱいの大きな袋を抱えた少女が、こちらに向かってきていた。それは聞き覚えのある声だった。
「というか前が見えないです！　どこに行っちゃったの、私のリンゴ！」
「モニカちゃん？」
「え？　誰ですか？　見えません！」
「とりあえず、荷物を一旦下ろしたら？」
「そ、そうですね！　気付きませんでした」
少女が荷物を下ろし、ようやく顔を見ることができた。金髪をツインテールにした十二歳くらいの女の子。俺達が王都に来た初日に泊まった宿屋『毛並みつやつや亭』のモニカちゃんだ。
「あっ！　この前うちに泊まってくれたクロちゃんと飼い主のヒビカお姉さんじゃないですか。こんにちは！」
パッと愛らしい笑顔で挨拶をするモニカちゃん。俺より先にクロードの名前を呼ぶあたり、彼女は本当に動物好きらしい。
「こんにちは、モニカちゃん。はいこれ、君のリンゴでしょ？」
「わあっ！　拾ってくれたんですね、ありがとうございます！　ああ、でも、リンゴが土塗れに」
モニカちゃんは悲しそうな表情で、受け取ったリンゴの土を払い落としたが、落としきれるもの

ではない。
「後で洗わないとですね」
「うーん、だったら私が今綺麗にしてあげる。生活魔法『バブルウォッシュ』」
魔法の泡がリンゴを包み込んだ。それがパッと弾けて消えると、リンゴの土汚れは綺麗さっぱりなくなっていた。
「凄いです！　ありがとうございます、ヒビカお姉さん！」
嬉しそうに満面の笑みを浮かべてお礼を告げるモニカちゃんに、俺もつられて笑顔を返した。
「宿屋の買い出し？」
「はい。でもちょっと買いすぎちゃいました」
モニカちゃんは頬をかきながら苦笑した。
「その荷物、ちょっとモニカちゃんには多いみたいだし、よかったら運ぶの手伝うよ」
「ええっ！　でも、悪いですよ」
「気にしないで。せっかく洗ったリンゴがまた汚れたら悲しいもの」
「あうっ、それを言われると反論できないです。えっと、じゃあ、お願いします」
「ふふふ、任されました」
モニカちゃんの荷物を持ち上げ、二人と一匹で『毛並みつやつや亭』に向かって歩き出した。
「重ね重ねありがとうございます、ヒビカお姉さん。お礼に、よかったらうちのカフェで紅茶をご

ちそうさせてください」
「カフェ？『毛並みつやつや亭』って、カフェもやってるの？」
「はい！　朝と夜は宿屋のお客さん向けの食堂で、昼間は出入り自由、動物同伴可能なカフェをやってるんです」
「動物同伴可能……じゃあ、クロも入って問題ない？」
「もちろんです！　むしろクロちゃんだけでもいいですよ。美味しいご飯をあげちゃいます！　そしてゆくゆくはうちの宿の看板犬、じゃなかった、看板狼に」
「ウォンッ⁉」
「ダメだよ、モニカちゃん。クロはうちの子なんだから」
「てへへっ」
冗談のつもりだったのだろう。モニカちゃんは楽しそうに笑った。
「カフェって食事もできるのかな」
「軽食だったら出せます」
「そっか。じゃあ、今日は『毛並みつやつや亭』で昼食にしようかな。クロもいい？」
「ウォンッ」
狼の鳴き声とともに、俺の脳裏に『畏まりました』というクロードの心の声が響く。そんなわけで、俺とクロードは『毛並みつやつや亭』へ向かうのだった。

「ただいま！」
モニカちゃんは堂々と正面玄関から宿屋に入り、先日朝食を食べた食堂へ俺達を案内した。いくつかのセーブルセットと、確かにカフェなのだろう、カウンター席が用意されている。
動物が同伴できるように、普通のカフェよりもテーブル同士の間隔が広いことに気が付いた。
「お帰りなさい、モニカ」
「あ、ステラちゃん！　来てたんだね、いらっしゃい！」
カウンター席からモニカちゃんを呼ぶ少女……というか、美少女がいた。
子供らしい愛らしさ全開のモニカちゃんとは系統の異なる、正統派美少女って感じだ。背丈も年齢もリリアンと同じ十歳くらいで、この世界の女性にしてはかなりのショートヘアだ。露草色の髪が肩にも掛からないほど短い。ボーイッシュかと言われるとそうでもなくて、やはり美少女なのだ。
裕福な平民が着そうな仕立てのいいドレスを身に纏っているけれど、貴族のドレスを纏っても違和感がなさそうだ。
「モニカちゃん、お友達？」
「はい！　紹介しますね。こちら、最近お友達になったステラちゃんです！　ステラちゃん、こちらこの前うちに泊まってくれたクロちゃんとヒビカお姉さんです！　私の荷物を運んでくれたとっても優しいお姉さんなんです！」

「あら、そうなの。はじめまして、ステラよ。よろしくね、優しいヒビカお姉さん」
「あはは。モニカちゃん、ちょっと大げさで。ヒビカです。よろしくね、ステラちゃん」
「うーん、ステラって呼んでもらえる？　ステラちゃんはちょっと恥ずかしいわ」
「じゃあ、私もヒビカでいいよ。よろしくね、ステラ」
「ええ、よろしくね、ヒビカ」
美少女ステラのパッチリ大きな金色の瞳が弧を描きながら俺を捉えた。笑顔も美少女である。ステラはカウンターから降りると、優雅な足取りで俺の方へ歩み寄る。
そして、ニコリと微笑むと――。
「きゃあああっ！　モフモフだわあああああああ！」
「キャ、キャイイイイイイイイイインッ!?」
――勢いよく、クロードへ飛び付いた。
「何この超でっかいワンコ！　凄い、抱きしめても手が届かないわ！　モフモフウウウッ！」
ついさっきまで感じられた、深窓の令嬢ばりの楚々とした雰囲気はどこへやら。欲望丸出しでクロードにじゃれつく少女の姿に、俺はしばし呆然としてしまった。
『助けてください、ヒビキ様ああああああああ！』
『主従繋糸』を通したクロードの悲痛な心の叫びによって、俺はようやく正気を取り戻した。
「ストープッ！　そこまでだよ！」

「あああっ！　もうちょっと、もうちょっとだけえええええ！」
ステラを力尽くで引き剥がし、クロードから距離を取らせる。力で抵抗するわけにもいかなかったクロードは、ようやく自由の身になって俺の背中に体を隠した……隠れてないけど。
「もう、ステラちゃん！　何をやってるんですか！」
モニカちゃんがステラを叱り始めた。
「だってぇ、すっごく大きいワンコだったんだもん。我慢できなかったのよ」
「気持ちは分かりますけど、動物が嫌がるようなスキンシップはダメです！　あと、クロちゃんは犬じゃなくて狼です！　そこんとこ間違えないでください！」
「ご、ごめんなさい」
「私に謝ってどうするんですか！　ちゃんとクロちゃんに謝ってください！」
「……そうね。何もかもモニカの言う通りだわ……その、いきなり抱き着いてごめんなさい」
モニカちゃんの剣幕に当てられたのか、ステラは素直にクロードへ頭を下げた。
「クロ、どうする？」
「ウ、ウォン……」
『は、はい、私は大丈夫です……』
「えーと、クロも許してくれるって」
「本当！　よかった。ありがとう！」

笑顔になったステラちゃんは両手を広げて一歩前に出た。そして、クロードは一歩後退した。いつでもさらに跳び退けられる体勢だ。誰がどう見ても警戒態勢である。
「えええええっ!? 許してくれたんじゃなかったの!?」
「当たり前です！ 全然反省してないじゃないですか、ステラちゃん！」
「えーっと、いきなり抱き着くのはもうやめてあげてね？」
「そんなあああああああああ！」
ステラは膝から崩れ落ちると、ガクリと肩を落として床に手をついた。
……もう、初対面で感じた美少女のイメージは完全に崩壊していた。

「あの、さっきは本当にごめんなさい。興奮しすぎちゃった」
「う、うん……」
あれからしばらくして、ステラはようやく正気を取り戻した。今は落ち着いた雰囲気でカウンターに腰掛けている。俺は彼女の隣に座り、俺を挟んだ反対側にクロードがいた。
幸い、カフェのお客はステラだけだったようで、彼女の失態が世間に知られることはなかった。
できれば俺も知りたくなかったなぁ……。
「でも、やっぱり大きい動物っていいわよね」
ほぅ、と頬に手を添えてため息をつきながらクロードを見つめるステラ。

「小さい動物も可愛いですよ、ステラちゃん」
カウンターに立つモニカちゃんがそう言うと、ステラは同意するように頷く。
「もちろん小さい動物も好きよ。だからこのお店に通ってるんだもの。今日も素敵なワンコ、じゃなくて狼との出会いがあったわ。ふふふ」
ぞわりっ！『主従繋糸』を通して、クロードが恐怖を感じたことが伝わった。いきなり抱き着かれたのがかなり尾を引いているらしい……俺もクロードに構いすぎないよう気を付けよう。
「あーあ、私もペットとか飼いたいなぁ」
「ステラはペットを飼えないの？」
不満げに呟くステラに俺は尋ねた。
「家の都合でちょっとね……ペットの代わりに小姑みたいなのはいるんだけど」
「小姑……？」
「可愛くて面白いんだけど、ペットの癒やし枠とはジャンルが違うのよねぇ」
「？？？」
これみよがしに頭を左右に振るステラだが、意味が分からず俺は首を傾げた。
「ヒビカお姉さん、紅茶ができました！」
「ありがとう、モニカちゃん」
「うちのお父さん渾身の一杯です」

「いや、そこまで大したものではないんだけど……」
自慢げにティーカップを差し出すモニカちゃんの後ろで、紅茶を淹れてくれた宿屋の店主さんが苦笑を浮かべていた。
「わぁ、良い香り」
「クロちゃんもどうぞ。動物用の甘さ控えめクッキーです！」
「ウォ、ウォン……」
姿が狼でも中身が獣人のクロードには味が薄かったのだろう。だが、モニカちゃんの気遣いを無駄にするわけにはいかず、クロードはクッキーを完食していた。
「よかった。気に入ってもらえたんですね。それじゃあ、クッキーのおかわりです！」
「ウォ、ウォオオ……」
「モニカちゃん、クロには人間が食べる普通の食事をあげてもらえる？」
「ええ？　でも、人間の食べ物は動物には味付けが濃すぎて健康に悪いって習いましたよ？」
「モニカ、クロはこれだけ大きいから、薄味のクッキーじゃ栄養が足りないんじゃない？」
ステラがそう言うと、モニカちゃんは目を見開いて驚愕した。
「そんなことが⁉　分かりました。すぐに美味しい料理を作りますね。お父さんが！」
「はいはい、分かりましたよ」
意気込むモニカの背後で、宿屋の店主さんが料理を作り始めるのだった。

軽食のサンドイッチと紅茶がとても美味しかった。その日以来、俺は『毛並みつやつや亭』の常連となるのだった。

◆◆◆

モニカちゃんと再会し、ステラと知り合った翌日。俺は冒険者装備に着替えていた。
「ヒビキ様、準備はよろしいですか」
同じく冒険者装備に身を包んだクロードに尋ねられ、俺はコクリと頷く。
「うん、ばっちり！　いつでもいいよ。皆も大丈夫？」
この場には屋敷の住人全員が揃っていた。俺の質問に皆が問題ない旨を返してくれる。
「承知しました。ではシア、我々を南の森へ送ってくれ」
「キュウッ！」
シアの首輪に下げられた『ポータルストーン』が輝き、王都バスティオンの南にある森へと転移する。視界が一瞬で切り替わり、俺達は森の中に立っていた。
エマリアさんやシアが所持しているダンジョン攻略報酬（ほうしゅう）『ポータルストーン』は、石一つにつき一カ所、転移先を指定することができ、仲間の『ポータルストーン』同士で転移先を共有することが可能だ。

シアは普段、リリアンとヴェネくんとともにテラダイナスへ転移しているが、これは俺の親友、大樹の『ポータルストーン』の転移座標であり、シアの転移座標は特に決まっていなかった。
今回は予めエマリアさんに頼んでシアを森へ連れ出し、この森の中に座標を設定してもらっていたのである。
何のためにと問われれば、誰に知られることなくこっそり森に入るためだ。
非力な鑑定士の少女、ヒビカに変装している身としては、冒険者装備の俺や獣人のクロードの姿を見られるわけにはいかないので仕方がない。
で、なぜこっそり森まで来たかというと……。
「では、現在のヒビキ様の戦闘能力の確認をしましょう」
……そういうわけである。

【技能スキル『鑑定レベル7』を行使します】
【名　前】真名部響生
【性　別】女
【年　齢】17
【種　族】現人神
【状　態】健康

【職　業】鑑定士（仮）（レベル45）
【レベル】52
【ＨＰ】611／611
【ＭＰ】392／392
【ＳＰ】1187／1187
【物理攻撃力】291
【物理防御力】219（＋120）
【魔法攻撃力】276
【魔法防御力】176（＋60）
【俊敏性】514
【知　力】599
【精神力】968
【　運】65
【固有スキル】『識者の眼（オリジン）』
【技能スキル】『鑑定レベル7』『翻訳レベル2』『魔導書レベル2』『宝箱レベル9』『契約レベル3』『医学書レベル2』『暗号解読レベル2』『精霊呪術レベル2』『魔法解析レベル4』『罠感知レベル8』『気配察知レベル8』『瞬脚レベル7』

『流脚レベル6』『体幹制御レベル7』『剣技レベルー』『世界地図レベル4』
『複製転写レベル5』『救済措置レベル3』『自動書記レベル5』
『聖獣召喚レベルー』『辞書レベル4』
【魔法スキル】『生活魔法レベル7』『火魔法レベル2』『風魔法レベルー』
【　称　号　】『医療従事者』

改めて、これが今の俺のステータスだ。

以前、ローウェルで確認したステータスから特に変化はない。地上に戻ってから一度も戦う機会がなかったのだから、当然と言えば当然だろう。

一部のスキルレベルは上がっているけど、数値的にはテラダイナスを訪れる前とほとんど違いはないはずだ。

しかし、性別が女性化し、種族もヒト種から現人神になって、サポちゃんは『ステータスサポート』から理神の聖獣『アインス・フェアシュテイン』へと変貌している。それがどれくらい影響を与えるものかは不明だが、大きな変化であることも事実だ。

そのため、本人を含めて誰も、今の俺の戦闘能力を正確に把握できていなかった。邪神に命を狙われ、もしかすると日本のクラスメイトを助けるためにクリューヌ王国と戦う可能性もある中で、自分の戦力を把握できていないのは致命的だ。

その危険性はクロードも感じていたため、王都の生活に慣れてきた今、早いうちに確認しておこうという話になった。

技能スキル『自動書記』で空中に俺のステータスを書き出し、皆に見てもらう。

「へぇ、これがヒビキのステータス。私と同じ『精霊弓術』が使えるのね。ふふんっ、先輩として教えてあげてもいいわよ」

エマリアさんが自慢げに告げた。俺は「ぜひ」と首肯する。

「グローイングボウが完成したらお願いします」

主神様からもらった俺のメイン武器、神弓『グローイングボウ』は屋敷の庭で樹木の姿になって現在も成長中だ。熟成期間がいつ終わるのか俺にも分からない。

「あれ？　でも、ヒビキさんって固有スキル『識者の眼』の命中補正で弓は百発百中じゃありませんでしたっけ？　何を教えてもらうんですか？」

「あ、うん……そうかな」

「えええっ⁉　何よそれ、ズルくない⁉」

ユーリが気付いてはいけないことに気付いてしまった。おかげでエマリアさんから不満の声が上がってしまう。

「『精霊弓術』は魔法の矢を撃てることが一番の強みだから、そっちについて教えてほしいな。俺、

光の矢と火の矢は撃てるんだけど、風の矢はまだ出せたことないんだよね」
「風の矢は私の得意分野よ。任せてちょうだい！」
エマリアさんは笑顔でそう言った。機嫌が直って何よりである。
……出せたことないというか、光の矢の使い勝手が良すぎて風の矢を使う機会がなかったんだよね。でも、不可視の風の矢も便利そうだから『グローイングボウ』が戻ったら試してみたいな。
そんな感じで手持ちのスキルを一つずつ確認していった。
まずは魔法スキルからである。生活魔法は問題ないとして、火魔法や風魔法の具合を確かめた。
「前と違いはなさそうだけど、相変わらず魔法はしょぼいにゃねぇ」
俺が出した『ファイヤボール』の小さな火球を見て、ヴェネくんの口からそんな感想が零れる。
「うーん、もうそこはしょうがないかなって思ってる」
魔法とは神が人間に与えた小さな奇跡だ。そして俺の中にはそんな奇跡を否定し、物理法則などを定義する理神こと姉さんが眠っている。おそらくその影響だろう。
要するに、俺と魔法はとても相性が悪いのである。『精霊弓術』も魔法の矢こそ撃てるけど、威力はほどほどだし。
俺が苦笑を浮かべると、リリアンがパッと手を挙げた。
「お兄ちゃん、任せて！　魔法はわたしが頑張るの。パトリシアさんに、いっぱい教えてもらってるから、大丈夫なの」

「分かった。魔法はリリアンにお願いするね」
「うんっ！」
リリアンは満面の笑みを浮かべて首肯した。リリアンは王都に来てから毎日のようにテラダイナスに行って、パトリシアさんに魔法の修業を付けてもらっている。具体的にどんな指導を受けているのかは聞いていないけど、ヴェネくん曰く『いい感じ』らしい。
「お兄ちゃんもクロさんも、わたしが守るの！」
「リリアンちゃん、私は守ってくれないの？」
胸の前で両手をギュッと握りしめるリリアンを温かく見守っていたユーリが尋ねると、リリアンはハッとして慌て出した。うーん、とっても既視感のある光景……ユーリが楽しそうだ。
「あわわわっ！　ユーリちゃんも守るの！」
「えっと、私は守ってもらえないのかしら……？」
「あわわわわっ⁉　もちろんエマリアさんも守るの！」
「ヴェネとシアが入ってないにゃ、リリアンちゃん。仲間はずれにゃ～」
「キュウ……」
「ち、ちがうの！　みんな！　みんな、わたしが守ってみせるの！」
「……皆さん、揶揄いすぎですよ」
クロードが窘めるまで、皆はピョンピョン跳ねて慌てるリリアンを可笑しそうに見守っていた。

ほっこりした気持ちで魔法スキルの確認を終えた俺だったが……すぐに地獄を見ることになる。

「ふむ。『瞬脚』、『流脚』、『体幹制御』、どれも問題なさそうですね」

「それは、よかったけど……クロード、もう少し手加減して」

「ははは」

抑揚なく笑わないでほしい。まずは女性化による身体能力の違いを確認するべく『瞬脚』『流脚』『体幹制御』のスキルの使い勝手を確認することになった。

その方法とは、森の中でクロードと鬼ごっこである。

「あははは っ！　お待ちください、ヒビキ様！」

「怖い怖い！　クロード、笑顔で追い掛けてこないで！」

「あはははっ！　別に王都にいる間、狼の姿で過ごさねばならず鬱憤が溜まっているとかではありませんので大丈夫です！　さあ、ここから一気に詰めますよ！　お覚悟を！」

「だあああっ！　『瞬脚』『流脚』『体幹制御』フルパワアアアアッ！」

……というやり取りがありました。何度か逃走・捕縛・解放・逃走を繰り返し、ようやくクロードから及第点をもらえた時にはもうくったくたである。

立ち読みサンプル
はここまで

「最初は動きに若干の違和感がありましたがすぐに修正できたようですね」

肩で息をしながら地面に腰を下ろす俺とは対照的に、全く疲れた様子のないクロードが冷静に俺の状態を分析していた。

「女性化で少し体格が変わった影響だと思う。まあ、がむしゃらにやったら慣れたけど」

「ええ、そうでしょうとも。何事も全力でやればすぐに慣れるものです」

納得顔でうんうんと頷くクロードが今だけはちょっと憎らしい。いきなり全速力鬼ごっこをやらされるこっちの身にもなってほしいものだ。

「『気配察知』スキルの方は如何でしたか」

「そっちは普段通りの感覚だったよ……背後から迫るクロードの気配に何度怖気が走ったことか」

「ヒビキ様、怖気と言われると少々傷付きます」

クロードは耳を垂らしてしょげた顔になった。

「だったら笑顔で追い掛けてこないでよ。すごく怖かったんだからね」

「いやあ、久しぶりにヒビキ様の訓練ができるかと思ったら気合いが入ってしまいまして。きちんと訓練ができたのは、北のダンジョンの攻略を始めた頃以来ですから」

北のダンジョン第十階層のボス戦で邪神の聖獣イヴェルの転移罠にはまって以降、ダンジョン攻略を優先して訓練は二の次になっていたことを思い出す。

同時に、クロードのステータスに『デスマーチ・コマンダー』という鬼教官的称号があることも。